

2014年 京都キリスト召団集会だより (抜粋) 目次

2014年1月5日	「信仰、希望、愛」
2014年1月12日	「恩恵と義の賜物」
2014年1月26日	「律法・罪・死」対「キリスト・義・生命」
2014年2月2日	「生命の御霊の法」
2014年2月9日	「キリストに在る望」
2014年2月16日	「キリストの愛」
2014年2月23日	「キリストに在る生ける望」
2014年3月2日	「霊(天)の家」
2014年3月9日	「善をもて悪に勝て」
2014年3月23日	「神の絶対主権・独占活動」
2014年3月30日	「真のエクレシアの形成を目指して」
2014年4月6日	「測り難き、神の御旨」
2014年4月27日	「愛は律法を全うするもの」
2014年5月4日	「希望の源であり、忍耐と励ましを賜う神」
2014年5月18日	「十字架の言」
2014年5月25日	「無者、即、聖霊の宮」
2014年6月8日	「聖霊のバプテスマ」
2014年6月29日	「パウロにおける伝道の心」
2014年6月22日	「聖霊の宮、担いの愛」
2014年7月6日	「霊の賜物 最大なるは愛」
2014年7月20日	「愛は断じて滅びない」
2014年7月27日	「異言と預言」(コリント前14章)、 「パウロの福音の核心」(コリント前15章前半)
2014年8月3日	「朽つるもの、朽ちぬもの」
2014年8月17日	「神の栄光のために創造されし神の民」
2014年9月7日	「讚美、感謝の祈り」——詩篇より——
2014年9月14日	「霊の貧しき者」
2014年9月21日	「義に飢え渴く人々」
2014年9月28日	「一切の秘訣」
2014年10月5日	「主はわが力」
2014年10月19日	「全托!」
2014年11月2日	「主はわが牧者」
2014年11月9日	「永遠の生命に至る糧のために」
2014年11月16日	「我らの避所、また力、いと近き助け」(詩篇46篇)
2014年11月23日	「護りと導き」(付記)「集会だより」について 奥田昌道
2014年11月30日	「祈りの土台」
2014年12月7日	「主イエスはわが生命 すべてのすべて」
2014年12月14日	「一つ」



信仰、希望、愛

2014年1月5日

聖書朗読 コリント前書第13章(全)

「集会だより」読者の皆様、あけましておめでとうございます。本年も主の恵みの中にお過ごしくださるようお願い致します。寒さはいよいよ本番ですが、寒気に負けないう、適宜体を動かし、体力造りにも心掛けてください。

新年の元旦祈禱会は、イザヤ書60章を中心に御言葉をいただきました。

「**起きよ光を^{はな}発て、なんじの光きたり、エホバ(キリスト)の栄光なんじの上に照^{てりい}出たればなり。……**」

朝日の輝く元旦に相應しい、力強い主からのメッセージでした。

本日の新年集会(1月5日)は「信仰、希望、愛」と題し、コリント前書13章を中心に学びました。今年1年を通して「信、望、愛」を深く受け取って欲しいとの主の願いが込められています。奥田先生は、まず、同書12章に目を向けられ、賜物^{たまもの}が与えられている意味につき次のように話されました。賜物は、エクレシア(教会)を建てるため、主から賜ったものです。キリストの体、愛と望みの集会を一人ひとりが支えるために、主からいただいたものです。12章あつての13章であり、13章では、どこまでも無者、平伏しの魂である愛の姿が描かれています。

今日、奥田先生から「信仰」、「希望」、「愛」について、多くのことを語っていただいた。

「愛は外から見えないが、皆さんの人格の中に染み込んでいます。肉なる人間からは本当の愛も信も出てきませんが、キリストの信をいただいて、私達も主と同じ信の姿に化せられていきます。キリストの御言葉を『然り』として受け取るのが信です。信、望を根底で支えているのが愛であり、愛の姿は担^{にな}いのです。コリント前書13章が皆さんの生活にどれだけ活かしているか、日々、照らし合わせて考えてください。」(今日の講筵に関連する箇所として、コリント後書4章7〜18節、コロサイ書3章1〜17節、エペソ書3章、4章参照)。

そのほか、年間の目標として、「新館」を新たな祈りの拠点としたいこと、家族、友人が集会を共に出来るよう各自祈って行くべきこと、などが語られた。



恩恵と義の賜物

2014年1月12日

聖書朗読 ロマ書5章12～21節

今日は、多くの兄弟姉妹が集会に集われました。先生は、男性が少ないのが残念と言われました。男性諸氏のご出席をお待ちしています。毎回、極めて重要なメッセージがなされていますから、ご都合が悪い時には、是非ユーストリームでの視聴をお願いします。京都キリスト召団で検索すると

「USTREAM 京都キリスト召団その他」

「USTREAM 京都キリスト召団録画ビデオ」

等が出てきますので、いずれかを選択してパスワード

「kyoto928」

を入れると同時中継になります。過去のものも蓄積されていますので、同様の方法で視聴できます。

今日は、難解なロマ書5章後半部分をキリストの光に照らして解き明かしてくださいました。律法について記載された申命記の中には、地上の幸不幸の記事はありますが、永遠の生命の記事は出てきません。しかし、ロマ書では、キリストは律法の中にあつた方ですが、律法を突き抜けて律法の源である神と一つになられ、我々に神の御心を伝えられたという奥義が語られています。人間は、本質的に神様よりも自分を大事にするという罪の中にある存在ですから、自ら^{おのずか}は律法の源である神様に従うことはできません。それ故に、キリストは、人々を永遠の生命の世界に導き入れ、永遠の生命を与えんがために、ご自身が犠牲となって十字架に架かれ、一人一人の中に聖霊となって宿ってくださいました。この聖霊が我々の霊と一つとなつてくださっているのです。肉体は土に還つても、死んでも死なない永遠の生命を既にいただいているのです。これがイエス・キリストにより賜わる神の「恩恵^{めぐみ}と義の賜物」であり、永遠の生命にあつて力強く生きる勝利の道なのです。



「律法・罪・死」対「キリスト・義・生命

2014年1月26日

聖書朗読 ローマ書第6章1～14節

今朝、ある兄弟が集会場の窓から鴨川べりの柳を見て、芽吹きが始まりか少し黄色く見えると言う。目を向けると確かにそのとおりだ。寒さのゆるみで、柳も春への準備かしらと思う。

今日の聖日集会は、ローマ書5章後半から7章までを読み進んだ。「律法・罪・死」等の大きな問題であることや、その論じ方からして、やはり難しいところがある。それでもパウロの逆説的な言葉は、随所で私たちの胸に熱く迫ってくる。

講筵では、律法^{おきて}によって罪が認められ、罪は人を死に追いやるが、キリストの贖いと義は、私たちを生命^{いのち}へと導くものであることを力強く語っていただいた。奥田先生は、「律法・罪・死」と「キリスト・義・生命」との対決を、ローマ書の文語訳、新共同訳で読みながら話されたが、その一端を記す。

「キリストは、律法の中に生まれながら律法を乗り越え、律法の源である神と一つ（合体）になられた。そして私たちの罪と死を、全部、己が死をもって滅ぼしてくだされた。したがってローマ書6章11節にあるとおり、

『汝らも己を罪に対しては（罪との関わりにおいては）死にたるもの、神に対しては（神との関わりにおいては）、キリスト・イエスに在りて活きたる者と思うべし』

なのです。」

7章では人間パウロの嘆きが書かれており、人ごとではないと身につまされる。しかし、いよいよ8章が近い。先生は最後に、「律法・罪・死」の流れに対して、キリストが備えてくださった「別の道」つまり、ローマ書3章19～31節の贖いと恩恵^{めぐみ}の道の箇所を、深く受け取ってくださいと話された。

集会後の食事会では、姉妹方からキリストとの出会いとその後の歩み、洗礼についてなど、貴重な体験談を聞かせていただいた。総会では、新館の工事進捗状況の説明や、家具等の準備に関することを相談した。



生命の御霊の法

2014年2月2日

聖書朗読 ロマ人への書8章1～17節

〔証言〕

K姉妹より穏やかで優しい夫、K兄が1月23日安らかに主キリストの御許に旅立たれた旨の証を伺いました。

〔聖日集会〕

ロマ書の初めから第7章まで使徒パウロは、一人で艱難忍耐の死の淵を歩いてきましたが、第8章に至って聖霊様が伴走して凱歌が揚がった。

全人類の罪咎をかたづけてくださった十字架の贖いのスゴワザ

「この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。」

「キリスト・イエスに在るいのちの御霊の法は、なんじを罪と死との法より解放したればなり。」

と勝鬨が揚がった。

キリスト召団に属している者を霊人として一人一人を光で包んで主人公に選んでくださった。

御霊のキリストの生命が宿っている霊止ひとの生き方は活き活きと喜びと希望に満ちている。

主人公は死なない。(死ぬとドラマが終わるので終わらないドラマ)

キリストと共同相続人となり、世を変革していく意気込みの霊が、奥田師から発した集会となったことをたよりいたします。



キリストに在る望

2014年2月9日

聖書朗読 ロマ書8章18～30節

風の強い寒い日で参加者は少なかったですが、先生は、東京の記録的な積雪の中で持たれた新宿集会に出席され、ゆつくり休息する暇もなかったにもかかわらず、熱くロマ書8章を語られました。先日、M姉が四国のご自宅を引き上げられました。故M兄が設立された四国召団の拠点がなくなりましたが、その荷物の一部が新館に運び込まれ、四国召団の魂とともに京都召団と一つになりました。

今日は、ロマ書8章の最高峰の部分を語られました。大事なことは、キリストは、十字架に架かることによって、自我に執着するという罪から我々を解放してくださいただけでなく、復活されて聖霊となって我々の中に宿られ、生命の世界に導いてくださったという事実を受け取ることです。これを無条件に受け取ることが信仰です。目に見える奇跡やご利益が与えられるわけではありません。この世では、全てを確実に保証してくれるものはありません。聖霊に導かれた主の御言葉のみが拠り所となるのです。我々は、御言葉が足の灯、光となってください、御言葉が成就してくださいとの祈りを持って日々進むしかありません。いかなることがあっても、キリストが全責任を負ってください、全てを益としてくださいます。存在そのものが聖霊に貫かれることによって、平安が与えられ、どのような状況にあっても希望を捨てないで前進して行くという忍耐と勇気が与えられるのです。このような福音以外に、いかなる境遇にあっても大丈夫という確信を与えてくれるものがあるでしょうか。



キリストの愛

2014年2月16日

聖書朗読 ロマ書第8章31～39節

冬の祭典、ソチ五輪がにぎやかだ。日本選手の活躍も聞こえてきた。表彰台でメダルを手にした選手の喜びに溢れた顔。多くの汗と努力の結晶と思う。

今日の聖日集会は、先週に引き続きロマ書の高嶺に導かれた。奥田先生は、始めに、
「パウロが

「御子の福音において我が霊をもて仕うる神」(1・9)

と「御子キリストの福音」を前面に出しているが、ロマ書全体のトーンは「神の愛」
或いは「神」が前面に出ているように思われる」

と話された。そして、先生にとつては、具体的に自分(奥田先生)を救ってくださったのはイエス様であり、キリストが、御霊のキリストが導き手であつて、キリストが全てです、と力を込めて話された。先生は私達集会員にも、讃美歌121番(まぶねの中に)のキリストを、そして今も生きて働き給う御霊のキリストをリアルな御方として本気で受け取ってくださいと話された。

また先生は、「神の義」(神の正しさ)の前に人は誰も立てないが、キリストはその神の義に見事に応えられ、人に対しては義の審き^{さば}ではなく、どこまでも「愛」を貫かれたと。そして、「放蕩息子の話」、「姦淫の女の話」、「十字架上の盗賊の話」などを引き、私たちに對するキリストの愛を具体的に語られた。

ロマ書8章の所では、肉体には肉体の法則があるが、それに主導権を渡すことなく御霊の導きに委ねることの大切さを、また、スポーツでも教育でも各人が「自分らしさ」を出すように、

「貴方らしく咲きなさい」

と励ます事が大切であることを強調された(先生は、ここでソチ五輪、フィギュアスケート男子金メダル「羽生結弦」選手(19歳)の話を楽しそうに語られた。彼はジャンプで2回転倒したが全力で自分を演じきった)。最後に、

「キリストが私達と一つとなつてくださった故に、どんなことに会つても勝ち得て余りあり、「キリストの愛」から私達を引き離すことは出来ないのである」

と力を込めて話された。他にヨハネ伝13章、15章、ヨハネ第1書3章、4章の御言葉を学んだ。

今日の集會に、M兄の奥様が初めて参加され、祈りを共にすることが出来て感謝。



キリストに在る生ける望

2014年2月23日

聖書朗読 ペテロ前書1章1～9節

2012年2月28日にO姉が帰天されてから2年経ちました。先生は、集会の初めに、主様とY姉によって今まで自分が支えられてきたと述懐されました。そして、Y姉が集会の存続を願って平成9年（1997）に新館購入の種を蒔いておられたことを披露されました。今回それが実を結び、4月から新館で集会を始めることができるようになったことを天界のY姉も喜んでおられると思います。

証言では、K兄弟が学生時代にY姉と出会い、その笑顔に安らぎを得たとの思い出を証しされましたが、集会の誰もが同じ思い出を持っておられることでしょう。

講筵の要旨をご紹介します。信仰においては、主様を賛美すること、主様に護られていると実感することが大事です。そのためには、霊(天)の次元で救いを受ける必要があります。霊(天)の次元は目に見えませんが、キリストの御言葉の中には永遠の生命の種(聖霊)が宿っているのです。御言葉を受け取ること(聖書の御言葉と対話すること)と、御心を大事にすることで我々の中に聖霊が宿ります。生命の御言葉が我々の中で霊の生命いのちとなり、我々も新しい霊的存在者に変えられ、滅びない生命いのちを植えつけられ、死をも克服して天界に昇って行く力をいただけます。キリストの力と光が全てを引き寄せているのです。それゆえ、如何なる試練に出会っても喜ぶことができるとともに、キリストによって護られていることが実感できます。そこに静かな喜びと平安があります。この世では試練から逃れることはできませんが、様々な試練を体験することを通してキリストの言葉が本当であったという確信が湧き、最高の人生を生きたと証しすることができます。



霊（天）の家

2014年3月2日

聖書朗読 ペテロ前書2章1～12節（文語）

〔証言〕

伊東のA姉妹は、テープを何回も聴き、京都の集会に霊的参加されているとの証。

M姉妹は、天界の夫の霊に護られていることの実感を証された。

〔集会〕

主の導きにより「（財）京都キリスト召団」の表札が新館に掲げられ、春の到来とともに新しくスタートします。

〔講筵〕

ペテロ前書2章1～12節。私達はイエス様の恵みによって素晴らしい存在へと聖化されているので、一人一人が霊（天）の家となるように促され、私達のあるべき姿はどのようなものか（天国人として地上で生きるには、どうあつて欲しいか）が示された。

霊（天）の家…天の次元を宿している執成しの祈りの場。

活石 …辛いことや試練を恵みとして受け取って玉石となる。

霊の犠牲 …生活を捧げて活きなさい。ロマ書12章1節。

選ばれたる族…地に在る中でも、選ばれた者にふさわしい生き方をしましょう。

王なる祭司 …同じ天国人となりますようにとの執成しの祈りをする。

潔き国人 …行状を美しく為せ。

キリスト属 …死を突破する力を宿し、本当のいのちの歓びに溢れている。



善をもて悪に勝て

2014年3月9日

聖書朗読 ペテロ前書2章13～25節

今朝、日差しに誘われて縁側に出ると、ほのかな暖かみを感じられた。静けさの中で、うぐいすの声が聞こえた。耳を澄ますと繰り返し鳴いている。まだまだ舌が回っていないが「春」を呼んでいる。

このところ、ペテロ前書を学んでいる。ペテロは「望みの人」であり、ペテロ前書第1章には、私達がキリストによって「生ける望み」を懐く者とされ、

「朽ちず汚れず、萎まざる嗣業」

を受け継ぐ者とされたことがはつきり書かれてある。来る4月19日（土）に奈良キリスト召団主催でキリスト道講演会が開催されるが、そのタイトルが

「キリストに在る希望——輝く人生を生きる！——」である。

今日学んだペテロ前書2章、3章の箇所は、制度、雇用、夫婦関係などに関するペテロの勧めである。具体的に分かり易く、私達の胸を打つ内容であり次元も高い。正直、生身の人間には出来ないことが多いが、主の思いを心して受け取るべきである。

ペテロ前書2章22節以下は、今日の講筵でもイザヤ書53章をじっくり読んで深く受け取ることとした。妻、夫に対するペテロの勧めも、外見ではなく、内面に問いかける高くて深い内容である。奥田先生は、ペテロ前書3章9節にある、

「悪をもて悪に報ゆることなく……」

の箇所、ロマ書12章後半の御言葉と、同章最後の

「悪に勝たるることなく、善をもて悪に勝て。」

を引かれた。先生は

「不当な仕打ちに出会っても、此の世的な次元ではなく、それより一段高い所、一段上の所に対処し、そこで主に委ねる本当の強さで悪に勝ってください。主が私達をそのような『めぐみの高き峰』に引き上げてくださいます。主に立ち帰り、主様あなただけです、と祈っていきましょう。」

と熱く語られた。最後に、聖歌49番「歌いつつ歩まん」を心から歌った。

集会後、全員で内装工事が完成した新館に入り、1階集会室（洋室）、2階宿泊の間（和室）、3階黙想室（兼収納室）等を見て回り、室内のレイアウトにつき相談した。



神の絶対主権・独占活動

——ローマ書9章、10章——

2014年3月23日

聖書朗読 ローマ書第9章1～18節

水栽培をしていたヒヤシンスが3鉢、ピンクの花を咲かせた。横向きに房状に付いた小花が下から上に次々と咲いていくのも面白いが、香りも凛として味わいがある。

新館で集会が出来る一応の準備が出来たので、次週3月30日(日)から新館での聖日集会を始めることになった。奥田先生方の二階座敷における集会では、40年余りの長きにわたって熱い祈りの火が灯し続けられ、この間、多くの病める魂が癒され、キリストの生命をいただくことが出来た。新館の書架に、花一杯の庭園に座って微笑むY奥様の写真が飾られた。二階座敷から新館へ、新たな歩みが始まる。

今日の聖日集会はローマ書に戻り、第9章、10章を学んだ。パウロがイスラエルの同胞に対する悲しみ、痛みを述べているが、心打たれた。キリストが十字架上で、

「父よ彼らを赦し給え……」

と祈られたのと同じ次元である。奥田先生は

「イスラエル人が今日でも通用するほどの規範(律法)や深い御言葉を頂きながら、律法の文字面や御言葉を守ることにとらわれ、その奥にある神の御意を受け取る事から『ずれ』を来した。」

とも話された。福音の道、信仰の道に立ち帰ることの大事さを感じる。

また、先生は、ヨブの試練、生まれつきの盲人の話を引き、次のように語られた。

「私達は、自分ではなぜ? と思う事が時としてあります。そんなとき、その理由を必要以上に求めず、神の御意には深い愛があることに気付いて欲しい。キリストに在れば、どんなことがあっても大丈夫。どんな不条理があっても、その奥にキリストの深い憐れみがあることを信じて、キリストに委ねて行ってください。なぜなら、キリストは、貴方のために生命を棄ててくださったからです。皆さんは、その次元に来てください。」

今日は、M(隼)君(4月から小一)が讃美歌と一緒に歌い、新館への荷物運びも手伝ってくれました。



真のエクレシアの形成を目指して

2014年3月30日

聖書朗読 ペテロ前書1章22節～2章12節

多くの人の祈りが結実して新館が出来あがり、待望の献堂式が行われました。春の嵐のような雨の朝でしたが、奈良召団を始め多くの兄弟姉妹がこの良き日に参集されました。京都召団が会堂を持つことは、先生とY奥様の長い間の念願でした。それは、京都召団が一代限りで終わることなく永続することによって、この世に福音を告白していくという大事な使命を主様から授かっているとお考えによるものです。エクレシアは、キリストの十字架上の死とご復活の後、

「我が羊を飼え」

との、み言葉に従ってペテロから始まり、弟子達により各地に作られました。京都召団もその一翼を担うものとして、各人が先生ご夫妻の志をしっかりとして受けとめて、新たな気持ちを持って福音伝道の拠点となる新館での祈りを始めたいと思います。

京都召団の原点は、ペテロ前書、ヨハネ福音書13章～17章を心読・体得して実践することにあります。各人が主様から聖霊を受け、御霊の人となって主のため、世のために尽くしてゆく人に変貌しなければなりません。そのためには、自分の自我や誇りを捨てて、

「主様、あなたが全てですから全托します。私を導いてください。あなたが現れて

私の中で輝いてください。」

との祈りを積み重ねることが必要です。そして、毎日毎日を終末ととらえて、今日一日を一生懸命に生きてゆく、この世の使命、役割をしっかりと果たしてゆく、いつ倒れてもアーメン・ハレルヤ！との気概で生きてゆく。そうすれば、いかなる苦労や患難に遇おうとも、主様は、一人一人の思いを受けとめて、全てを益に変えられます。「隅の首石」^{すみ おやし}すなわちキリストに依り頼む者（ペテロ前書2章6節）は、決して辱めを負わされることはありません。



測り難き、神の御旨

2014年4月6日

聖書朗読 ロマ書11章1～24節（文語）

〔証言〕

S姉は、新館を見ての感激と主様に全托することで心配性からの解放を証された。

〔集会〕

シャロンの花満開のイエス様の香りと聖霊様の風の中で新しき御堂に兄弟姉妹が集われました。

〔講筵〕

「神は凡ての人を憐まんとために、凡ての人を不順の中に取籠め給ひたり。ああ神の智慧と知識との富は深いかな、その審判は測り難く、その途は尋ね難し。」

「これ凡ての物は神より出で、神によりて成り、神に帰すればなり、栄光としへに神にあれ。アアメン」

現世で民主主義の中で暮らしているので判りかねますが、神主主義（宇宙の統治者の絶対主権・独占活動）は、大きなスケールで円現している。

その中で私達キリスト者は、ただ憐れみにすがる他なし、ひたすら主の恵み・主の選び・主の愛の貫きに抱かれてあるから喜びましょう。

主の御旨は測り難くてもキリスト様がねんごろにひもといてくださいますので躓きません。

世界が悪い方向（エントロピーの法則）に進んでいても、キリストに在る者は滅びない。キリストの証人として、死んでも死なない命を実証しましょう。



愛は律法を全うするもの

2014年4月27日

聖書朗読 ローマ書第12章(全)

このところ好天が続いており、樹木が一斉に若葉を付け始めた。ツバメの夫婦は忙しうに飛び交い、間もなく巣作りが始まる。一年で最も美しい時期である。

改装を終えた新館の集会場で、今日が3回目の聖日集会となる。新館では、皆さんが余裕を持って座ることが出来、新たに3人掛けの机を2脚置いたことで御言葉を筆記するのに便利となった。

今日の聖日集会は、英語訳聖書の御言葉を参考にしつつ、ローマ書第12章、13章を中心に学んだ。原文のギリシア語から英訳された聖書であり、原文の味わいを出来る限り受け取りたいとの思いである。ただ、愚生には英語を読み解く能力はないので、以下、心に残った英訳の言葉を書いてみたい。下線部分が、注目の言葉である。

①「あなたがたは、この世に倣^{なら}ってはなりません。」(ローマ書12章2節)

Do not conform yourselves to the standards of this world,

スタンダード:「基準、尺度」。(この世の行動基準に合わせてはいけません。)

②「勧める人は勧めに精を出しなさい」(ローマ書12章8節)

if it is to encourage others, we should do so.

エンカーリッジ:人を「勇気づける、励ます、元気づける」。

③「慈善を行う人は快く行いなさい。」(ローマ書12章8節)

whoever shows kindness to others should do it cheerfully.

チアフリー:「上機嫌で、元氣よく、進んで」。

④「希望をもって喜び」(ローマ書12章12節)

Let your hope keep you joyful,

ジョイフル:「出来事などが」「喜びに満ちた、喜びを与える」

(あなたがたの希望が、あなたがたを「喜びに満ちた」状態に保ってくれるようにしなさい。)

(「希望があるからこそ、あなたがたは喜びに満ちた状態でおれるのだよ」との意。)

私達はキリストによつて神の民 (God's people) としていただいた者。

「真のエクレシアの形成をめざし」

の歩みが始まった。



希望の源であり、忍耐と励ましを賜う神

2014年5月4日

聖書朗読 ロマ書15章1～13節

五月の美しい朝に、奥田先生のお母様の召天（5月4日）35周年とM兄の召天（5月5日）2周年の祈りを捧げ、静かな集会が持たれました。

先生は冒頭に、改めて今年の課題は、

① 信望愛を日常生活の中で実践し、それを結実させること、

② 真のエクレシアを形成すること、

すなわち、個人がキリストに繋がることに留まらずに、愛の交わりの存在を世の中に示してゆくことであると話されました。それは、京都召団が、御言葉を守って地道に福音を実践してゆくという大事な使命を主様から賜っていることの再確認です。

今日の講筵では、ロマ書15章4節、5節、13節から希望について深い内容が語られました。実例として、獄中のパウロとシラスが神を賛美する祈りのすがた（行伝16章）や、難破船の中で人々が絶望状態にある時に神に信賴して希望を持ち続けたパウロの不撓不屈の生き方（同27章）が語られました。

このことは、決して過去の出来事ではありません。我々の日常生活は、パウロと同様な艱難や忍耐の連続です。これを持ち越えるためには、光（希望）が必要です。希望があるからこそ、地上での艱難に耐えられるのです。希望は、自分の中から出てきません。希望の源は主様であり、忍耐する力と励ましを賜うのも主様です。主様から頂く希望と励ましによって、地上の様々な困難を突破する忍耐力が蓄積されてゆきます。そのためには、日頃から聖書に親しみ、希望が与えられた御言葉、自分が支えられた御言葉を書きとめて蓄積し、いざという時にその御言葉が力の源泉になるように備えておくことが大切です。



十字架の言

2014年5月18日

聖書朗読 コリント前書1章1〜25節

今日からコリント前書の学びが始まった。講筵の中心は、

「十字架の言は^{ことば}亡ぶる者には^{おろか}愚なれど、救わるる我らには神の力なり。」（コリント前1・18）

で、先生は次のように説かれた。

パウロは、ガラテヤ書の

「十字架につけられ給いしままなるイエス・キリスト」（ガラテヤ3・1）

と同じく、「十字架のキリスト」だけを宣べ伝える（コリント前1・23）。これは、徴（奇跡）を求めるユダヤ人には躓きであり（なぜなら、神の子なら十字架から飛び降り脱出できるはず。神の子が無残な死に方をするなどありえない。イエスは律法を破り己を神と同一視する反逆の徒なのだ）、智慧を求めるギリシヤ人（異邦人）には愚かである（なぜなら、見えない神が人間の姿・形で現れるなどありえない）。しかし、神は、この愚かと思われ、十字架上で死んだ弱いキリストこそが救い主だというこの「愚かな宣教（foolish message）」を受け取る者（信ずる者）を救うのを善しとされたのだ。

これは現代人にも当てはまる。奇跡やご利益を求める人には「十字架の福音」は躓きであらうし、誇り高い知識人には「十字架のキリスト」による救いは屈辱と映るであらう。しかし、「無きが如き者」である私たちを選んでくださり、

「キリスト・イエスこそは、汝らの智慧と義と聖と^{あがない}救贖とになり給えり」（コ

リント前1・30）

と宣言してくださる神の恵みに涙する者には、十字架の御前にただ平伏すほかはない。

講筵の前と後にも歌った讃美歌138番

「ああ主は誰が^たため世にくだりて かくまでなやみを受けたまえる。

十字架のみもとに心せまり 涙にむせびてただひれふす。」

の心根である。先生は、講筵の最後に次のように話された。

「十字架を愚かとする者は亡びる。十字架の事態を平伏してありがたく受け取る者にのみ、神の恵みが与えられる。何処までも、「十字架のもとでの聖霊のバプテスマ」の事態を祈り求めて行きましょう。ペンテコステ集会（6月8日）を前にして聖書の御言葉に親しみ、祈りを深めてください」

と。〈お知らせ〉6月8日（日）はペンテコステ集会、食事会、総会です。午後も行事を予定しており、時間を作って御参会ください。



無者、即、聖霊の宮

2014年5月25日

聖書朗読 コリント人への前の書3章10～23節

〔証言〕

K兄：新会堂で主に逢いまみえ、安らぎを得ることの喜びを証されました。

K姉：46年の夫婦生活を振り返ったの恵を告白してくださいました。

M兄：主にあつて様々な囚われから順次解放され本当の自由の身とされたことの証。

〔集会〕

多くの証言が在り、信望愛の充滿したエクレシアとなりました。

〔講筵〕

利己的本能としての「わたくし」を滅却して、天に従う道を探し求める無我の境地

「無者、即、聖霊の宮」

自我を否定し、自己を忘れさり、唯一絶対なる主にとらえられ、十字架を信じることによって、人間を神（絶対者）とする権威主義から解放され、全能の主の前に謙虚な霊をもつて責任を負う新しい一個の人格としての聖霊の宮、

「汝ら知らずや、汝らは神の宮にして、神の御霊なんじらの中に住み給うを。」

我々は、イエス様の恵みによって聖霊の宮とされているので、いかに在るべきか、なにを求めてどのような生きていくかの指針を受けました。



聖霊のバプテスマ

2014年6月8日

聖書朗読 ヨハネ14章6～24節

新館での初めての聖霊降臨節集会に多くの兄弟姉妹が参加され、A、K姉妹が、日常生活において主様と共に生きているという感銘深い証言をされました。

講筵では、聖霊を受けることの意味とその方法が解き明かされました。

聖霊は、

「良い贈り物、完全な賜物」

として、無条件の恵みとして

「上から、光の源である御父から」

降り注がれます（ヤコブの手紙1章17節）。

聖霊を受けるのに、異言や預言の能力などの特別なものは何一つ必要ではありません。主キリストの十字架で過去・現在・未来の自分の全存在が既に片付けられていることを信受することが必要です。そして、聖霊を頂く秘訣は、十字架を瞑想し、それに自分を投げ掛ける、十字架に自分を預けて

「主様！」

と唱えることです。主様の恵みにすがるしかないとの「ひれ伏し」の魂の自覚で御名を呼ぶことです。

聖霊の本質は、見返りを求めない愛です。聖霊の人として生きるとは、愛の人として生きることです。日々の生活の中で十字架を瞑想して主様に思いを向け、常に祈りの基盤を作っておくことが大事です。この秘訣を体得しておく、いざという時にうろたえることがありません。艱難を跳ね返す生命力が宿っており、いかなる事態に出会っても平安があります。また、平安や希望を他者に分け与え、主様のために働くことができます。弱い者の中に静かに宿る聖霊が、その人を用いて大きな栄光を現してくださるのです。



パウロにおける伝道の心

2014年6月29日

聖書朗読 コリント前書9章16～23節

今日の聖日集会を始める準備で、ユーストリームの立上げ不調のため、配信までに時間がかかってしまった。その間に奥田先生は、「事務連絡」として夏の特別集会に関して話が出された。話されるにつれ、その内容は連絡事項に留まらず、集会に連なる者に対し

「日常生活の中での福音」

を具体的、実践的に担うことを促すものとなった。大事なことと思うので、その要点を以下に紹介する。

「今夏の特別集会の主題は、『聖霊に在る（由る）・信望愛の実践』を考えている。私達の福音は日常生活を離れてはあり得ず、生活の中に染み込んでいることが大切です。私達の回りのごく普通の生活者（庶民）に、福音はまだまだ浸透しておらず残念に思っているが、そのために集会員は自らを徹底的に投げ出し、一人ひとりが福音を伝える使命を自覚して働くことが必要です。特別集会に向けて、各自が聖霊の導きを受けつつ、新約聖書（共観福音書「マタイ、マルコ、ルカ」と、特にヨハネ伝。使徒行伝及び使徒書簡）を読み込み、自らを支え力づけてくれた御言をノートに書き記すことを宿題として欲しい。キリストが貴方に、何を願っているかというのをいつも考えて欲しい。」

次に、聖日集会では、コリント前書9章、10章及び使徒行伝20章などを中心に学んだ。パウロが福音を述べ伝えるにあたっての平伏しの姿に胸を打たれた。キリストの福音に妨げなきように一切のことを忍び、自らを誇らず、無報酬で福音を述べ伝え、弱き者を得るために弱き者の姿となり、多くの人をキリストの元へ導くため自ら凡ての人の奴隷となった、とある。奥田先生は、パウロが使徒行伝20章で長老達に語った箇所を引き

「御霊の主キリストと御言こそが、私達やエクレシアを常に守り、浄めて、完成させてくださる原動力です。」

と話され、パウロの伝道の心を各自が深く胸に刻む事の大切さを話された。

なお、次回7月6日の聖日集会后、午後から食事会、総会を行い、併せて夏季福音特別集会の案内書発送作業を行うことを申し合わせた。



聖霊の宮、担いの愛

2014年6月22日

聖書朗読 「コリント前書6章12〜20節」

聖日の朝、2週間ぶりに新館の玄関扉を開けると、土間に枯れ葉が散らばっている。集会場に入り鴨川べりのガラス戸を開け、新鮮な空気を取り入れる。その後、兄弟姉妹で手分けして掃除と湯茶の準備を行い、持ち寄りの花を飾って集会場が浄められる。

聖日集会は、今日からまた、コリント前書の学びに戻った。今日は5章から8章までを読み、ガラテヤ書、ローマ書からも、関連する御言を引用していただいた。パウロはコリント前書1章で、コリントの信徒を誉めているが、今日学んだ箇所を読むと、惨憺たる状況もあったことが分かる。これらに対する苦言と叱責を書かざるを得なかったパウロの胸の内が思われる。今日の箇所から、キラリと光った御言を書いてみたい。

「主につく者は之と一つ霊となるなり」(コリント前書6章17節)

「汝らの身は、その内にある神より受けたる聖霊の宮にして、汝らは己の者にあらざるを知らぬか。汝らは価をもて買われたる者なり、然らばその身をもて神の栄光を顕せ。」(コリント前書6章19〜20節)

「キリストに事^{つか}うる者は神に悦ばれ、人々に善しとせらるるなり。」(ローマ書14章18節)

「わたしたち強い者は、強くない者の弱さを担うべきであり、自分の満足を求めるべきではありません。」(ローマ書15章1節 新共同訳)

最後に奥田先生は、今日のまとめとして次の2点を話された。

① 私達はキリストの貴い犠牲によって古い生活から脱出させられ、聖霊の宮とされた者です。この世に属する者ではありません。

② 私達はキリストの有^{もの}として、それに相応しい生活をする事です。弱い兄弟を担うこと、自分は一番低いところに降りて、これらの兄弟を暖かく担う者でありなさい。」

集会後、夏の特別集会に向けて、今後の準備に関する相談を行った。



霊の賜物 最大なるは愛

2014年7月6日

聖書朗読 コリント前書12章(全)

夏季福音特別集会の案内が出来あがり、本日発送されました。今回は、出席者全員に対し、聖書の中から、自分が支えられた聖句を拾い上げるといふ具体的な宿題が課されました。宿題に応えることの出来るように、日常生活において聖書に親しみ、その成果を披露するための準備をしたいと思います。

先生は、冒頭、今日の讃美歌について、492番(「神の恵みはいとたかし」)の「神の恵み」の根底には136番(「血しおしたたる主のみかしら」)の主の担い(犠牲)の十字架があると切り出され、「キリストが最後には十字架上の死を受け取られたことを厳粛に受け止め、これに根ざした祈りをしているか、キリストの願っておられる姿に徹しているか、神様から頂いた恵みを私することなく、社会(周囲)に還元しているかが重要である。そのためには、日々の生活の中に御霊のキリストが生き生きと働いておられるかを、聖書(み言葉)に照らして絶えず検証する必要がある。」

と語られました。

さらに、コリント前書12章にいう賜物とは、

「特別の使命を果たすために、知識、預言、癒しの力など神様から目的を持って与えられたものであり、人から出たものではない。」

と賜物の真の意味を説かれました。他方、

「愛は、キリストから全ての人に普遍的な与えられたものであり、キリスト(聖霊)が宿ることによって働くものである。一人一人が聖霊の愛の人であってほしい。主の愛に貫かれた人であってほしい。13章4節から7節をバックボーンとした人生を歩んでほしい。」

と語られました。参加者が少なかったために、13章のクライマックスは、次回に持ち越されましたが、今日の講筵は、夏季特別集会の主題である「聖霊に在る(由る)信望愛の実践」に通じるものでした。



愛は断じて滅びない

2014年7月20日

聖書朗読 コリント前書13章(全) 新共同訳

今日の聖日集会の初めに、奈良のK兄とN姉のお二人から、主の恵みを讃えるうるわしい証言があった。詳細は録音テープ等では非聴いて頂きたい。K兄は、7月13日の新宿集会(講演会)に参加した恵みと、『無者キリスト』講読会で「碎け」の箇所を学び、キリストの愛の深さを実感させられたと話された。また、英訳聖書の御言を引かれ、英語の御言がリアルに自分に迫って来ることに、その御言への深い読み込みの感動を熱い思いで話された。N姉は本日が誕生日であること、最近、乗用車にぶつかられる被害に遭ったが、幸い軽傷で済んだこと、加害者の女性との話し合いの中で思わず主を告白し、主を伝えたいという自分でも不思議な経験をしたことを嬉しそうに話された。姉は、このところ、体調不良で集会を休まっていたが、今日の証言は健康を回復した喜びと共に、表情が喜びに溢れており、聞く者を共なる喜びへと誘った。

講筵では、前回に引き続きコリント前書13章を学んだ。特に今日は、奥田先生から、信望愛の中で、「愛」に根ざし、「愛」を基とすることの大切さが新約聖書の色々な箇所で見られることが示された。具体的には使徒書簡から「愛」に関する箇所を探し出し、その御言を味わった。キリストに在る「愛」を根底にし、御霊に満たされている所に、喜び、平安、柔和、謙遜、御霊の賜う一致、忍耐、練達、希望が生み出される。

次いで、小池先生著『福音の心臓』から、次のような「小池私訳」が紹介された。

「愛はすべてを荷いぬき、すべてを信じぬき、すべてを望みぬき、すべてを耐

えぬ。愛は断じて滅びない。」(コリント前書13章7節、8節)

ガラテヤ書5章6節には

「キリスト・イエスに在りては、ただ愛に由りてはたらく信仰のみ益あり。」

とある。私達はこの愛を頂いて、地上の営みを生き活きと元氣良く為す者でありたい。主にある兄弟へ。淡路島のK姉の御夫君のお姉様が激しい病苦を耐えておられます。どうか、主キリストがその痛み、苦しみを共に荷ってくださり、その痛みが和らぎ、慰めと平安がありますように、との祈りをお願い致します。



「異言と預言」、「パウロの福音の核心」

——コリント前14章、15章前半——

2014年7月27日

聖書朗読 ピリピ書4章4～7節

〔証言〕

K姉…参加型の今年の夏季特別集会の宿題に取り組み中との中間報告。

奥田師は、今日も楽しく預言されると予言された。

M兄…蕎麦打ち体験と福音の適用。ダニエル書12章10節の通り

〔集会〕

今日もイエス様が聖霊様となって御堂に満ちてください、霊眼開かれ、活ける命の御言葉が私達に染み込んで命づけてくださった。

〔講筵〕

「霊で祈り、知性でも祈りましょう。霊で賛美し、理性でも賛美しましょう。」

異言を語る時は、適切に秩序正しく行いなさい。異言は、ときとして、品位と秩序が無く発せられ、霊縛される危険が伴うので注意が必要。

秩序と平安の主から現れる預言は、正しく澄んでいて、人を益する、おとなの言葉

「もし死人の復活なくば、キリストもまた甦えり給わざりしならん。」

本来、霊止^{ひと}は、死ぬはずの者でなかった。主の十字架の贖罪と栄光の御姿への変貌（ご復活の事態）により本来の姿（神の似姿）へと回復してくださった。

「そこで愛する皆さん、このように勝利は確実なものですから、しっかりと立って、動揺することなく、いつも主の働きに熱心に励みましょう。なぜなら、復活は確かであり、主のための働きが、決して無駄に終わらないことを私達は知っているからです。」



朽つるもの、朽ちぬもの

2014年8月3日

聖書朗読 コリント前書15章20～26、35、42～55節

夏季福音特別集会が近づき、M夫妻を中心に準備も佳境に入ってきました。

全員に宿題を課された先生の思いを受けとめ、一人一人が日常生活において御言葉を大切にしていることを披露するようになりたいと思います。

今日は、コリント前書15章を中心にして、コリント後書4章16節から18節、5章、6章1節から10節、詩編107、115、117、118編、ロマ書8章31節から39節、黙示録7章13節から17節、19章、21章を引用しながら、死という相対的次元を突き抜けたキリストの永遠の生命の世界と、それを頂いた我々の生き方について語られました。

キリストは、十字架に架かられ、我々にご自身の生命を与えられました。それによって、我々に地上の死を超えた永遠性を持ったものが与えられました。我々は、朽ちるものとして生まれましたが、キリストに出会ったことによって朽ちないものとして生きる道が与えられたのです。このことは、今までの自分の生き方からの大転換を意味します。

「己を棄て、日々おのが十字架を負いて我に従え」

とのキリストの御言葉に身を託し、キリストご自身と一つにされた生き方です。何があつても、いかなる時にも、主を賛美してやまない生き方を人生の目標にするのです。そして、主様から永遠性を頂いているからこそ、この地上の勤めを疎かにすることなく、一生懸命に果たしていくことができるのです。



神の栄光のために創造されし神の民

2014年8月17日

聖書朗読 エペソ書1章3～14節

今日は夏季福音特別集会を直前にしての準備集会。奥田先生は、講筵の始めに、特別集会の前哨戦が既に開始されているとして、力強く

「特別集会はもう始まっている」

と話し出された。先生は、夏季集会に向けてイザヤ書（特に40章以降）を読み込まれ、同書43章と新約のエペソ書1章とが響き合っていることに深い感動を覚えたと次のように語り出された。

「イザヤ書43章はイスラエルの民に対する神の熱愛の言が迸り出ている。たとえ炎の中、洪水の中を行くときも、絶対に守り抜く。常にお前（汝）と共にいる。」

「この民はわが誉れを述べしめんとて、我おのれのために造れるなり」（イザヤ書43章21節）

エペソ書1章では、

「神は私たちをキリストにおいて（キリストと一体なる者として）、あらゆる霊的な祝福で満たしてください。天地創造の前に既に神は私たちを神のもの（神の民）として選んでくださいました。神は、愛の故をもって、私たちをキリストに在って神の子供たちとすることを決めておられた。しかも、それは神の喜びでありご目的であつた」（英文の訳）

とある。パウロは続けて、信する者に働き給う神の力の絶大なこと（その力は、神がキリストを復活させられたと同じ力強いものである）を悟らせてくださるようにと祈ってくれている」

と。二つの書を読んで、私達の為に、主がなさってくださいましたことの大きさに驚かされるばかりだ。先生は、最後に次のように話された。

「キリストが私達のために考えておられることの大きさはすごいです。私たちはそれを知らない。そして自分で自分に限界を設定してしまう。私たちはキリストの^{つかさど}有なのです。限界を設定してはいけません。私達の生活は、キリストが司り、導き給います。過去に捉われることなく、常にポズィティブに、前に向かって進んでいきましょう。」

と。集会後、特別集会の役割を確認し準備を開始した。新館が事務室兼作業室となり、当日の配付資料も大方、出来上がった。2階では、宿泊者への準備も為された。

集う皆さんを「おもてなしの心」で迎えたい。



讃美、感謝の祈り——詩篇より——

2014年9月7日

聖書朗読 詩篇37篇(全) 文語訳

今日は朝から久し振りに晴れ渡り、さわやかな聖日となった。2週間ぶりの集会は、夏季福音特別集会の感謝集会へと導かれた。

今日の講筵で奥田先生は、特別集会の恵みと感謝を、祈りの書「詩篇」の中から4つの詩篇を選び、その文語と英文の御言を深く味わうことによって紹介された。先生は、自ら「感謝と讃美の祈り」と題するプリントを作られ、大事な聖句の箇所につき、文語と英文を対比して記載し、注目すべき英文の箇所に下線を引かれている。こうすると文語でやや分かりにくい箇所が、ぐつと身近になる。詳細は、プリントに目を通していただきたいが、以下、心に残った箇所を掲げてみる。

詩篇37篇4節「主によりて^{よろこび}歡喜をなせ」(文語)

その英文を和訳すれば、「あなたの幸福を主様の中に探さない。」

同篇5節「汝の途^{みち}を主に委ねよ」(文語)

英文を和訳すれば、「あなた自身を主に預けなさい(託しなさい)。」

その他、同篇7節の英文和訳は、

「忍耐強くありなさい。そして主があなたのために働いてくださるのを待ちなさい。」

となる。136篇では、「his love is eternal」(主の愛は永遠であるから)が繰り返されている。138

篇3節の和訳は、

「あなた(主様)は、私があなたを呼び求めたとき、私に答えてくださり、あなたの力強さで私を力づけてくださいました。」

となる。139篇6節は、

「Your knowledge of me is too deep, it is beyond my understanding.」

「私のことに関する貴方(神様)の智識はあまりにも深く、私の理解を遙かに超えています。」

となる(「エン・クリスト」第9号「汝知り給う」も参照)。二千年前の素直な魂の呼びかけは、今でも読む人の心を打つ。先生は、プリント作成にあたり、その準備として、見開きのノートの右側ページに重要な聖句を書き写し、左側ページに関連する御言を拾い出して記載することであった。各自工夫し独自の御言集を作って、日々の感謝と讃美の祈りに備えたいと思う。



霊の貧しき者

2014年9月14日

聖書朗読 マタイ福音書5章1～12節

〔証言〕

K兄：霊において豊かなものを頂いて日々嬉しくて歓びに溢れている存在を証された。
M兄：心を尽くし、命を尽くし、力を尽くして主様を愛し、人々に尽くしたい。

〔集会〕

今日も奥田師からイエス様が御語り出てください霊の世界が宿られました。

〔講筵〕

「心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。」（マタイによる福音書5・3）

Happy are those who know they are spiritually poor;
the Kingdom of heaven belongs to them!

本来、人は霊^{ひと}止、神霊の止まる存在で、主を慕う霊であるべきなのに、忘れてしまつて、霊が貧しくて、餓死寸前で孤独死しそうな状態、このままでは、霊は枯渇して死んでしまう。それが滅びです。人はそのことに気が付かない。

しかし、そのことに気がつく、助けを呼び求める。神はご自分の豊かな生命^{いのち}で満たしてください。霊の食物は御言・御霊である。

「活かすものは霊なり、肉は益するところ無し、わが汝らに語りし言は、霊な
り生命なり。」（ヨハネ伝6・63）

霊が眼覚め（霊止として新しく生まれ）、内なる魂に光が射し込み、霊が満たされると、霊は輝き、祝福を伴い、命張り、霊服（聖霊様）に包まれ、こうして内なるものが健やかになると、外なる体も活き活きと生かしていただき、幸いです（ロマ書8・9～11）。

ハレルヤ



義に飢え渴く人々

2014年9月21日

聖書朗読 マタイ伝5章1〜16節

9月に入って好天が続いており、暑さも収まって過ごしやすくなってきた。郊外では稲刈りが進んでおり、栗、ぶどう、梨など、秋の味覚も食卓に上がり出した。

今日の講筵は、先週に引き続きマタイ伝5章の御言に取り組んだ。英文聖書の御言を解説して頂くと、和文とは違った表現に気付かされ、聖書の理解に幅が出て味わい深い。

① Happy are those whose greatest desire is to do what God requires ;
God will satisfy them fully! (マタイ伝5章6節)

英文を和訳すると

「その人の最大の欲求が、神（主）が求め給うところ（御意・みこころ）を行うことである人々は幸いである。神（主）はその人々を十二分に満足させてくださる。」

ここまで書いて詩篇91篇14節の、神が私達に語られた約束を思い出した。

「彼、その愛を我（神のこと）に注げるがゆえに、我これを助けん、彼、わが名を知るがゆえに、我これを高き処に置かん。」

② You are like salt for the whole human race. (あなたがたは全人類のための塩である。 5章13節)

You are like light for the whole world. (あなたがたは全世界のための光である。

5章14節)

この英文を読み、私達の使命の重大さを思う。

奥田先生は、最後に次のように語られた。

「キリストは、全人類、全世界にとつて地の塩、世の光となってくださいました。そして、私達一人ひとりの中に、聖霊の光、御霊の力を注ぎ込んでくださるのです。何よりも先ず

『主キリスト様、あなた御自身が私達の中に生きて輝いてください。』

と祈りましょう。自分の智慧、力に依り頼まず、讚美歌517番（「我にこよと主は今」）にあるように、何処までも主に帰っていきましよう。」

と。集会の初めにH姉、K姉から、日常生活の中で、主が具体的に働いてくださったとの麗しい証言があった。主につながる兄弟からの集会宛の通信、集会の場での生き活きとした証言を聴ける私達は「Happy」である。



一切の秘訣

2014年9月28日

聖書朗読 マタイ伝6章19～34節

9月最後の集会も前回と同様に、奥田先生は、マタイ伝6章を中心に文語訳、新共同訳及び英訳の聖書から重要な箇所を抜粋したレジュメを用意し、どの訳がキリストの御心をよく表しているかなどを鋭く指摘されました。

K兄の

「困難の中にあるからこそ主様に信頼を置く。喜びが込み上げてくる」

という証言に共感され、キリストが生活の中に沁みこんでいること、キリストと共なる日々であることが大切であると次のように語られました。

「朝、目覚めたとき、まず主様に心を向けること、目の前の心配事や今日しなければならぬ様々の事柄に思いを寄せる前に、まず主様の聖名を讃えて感謝し、

『御心に適って過すことができるように必要な智慧と力をお与えください、あなた

が私の中に宿り、私と一つとなってお導きください』

と祈ることです。日々押し寄せる様々な思い煩いから解放されます。」

と。

私たちは、聖書の言葉が本物であることを実証するために、この世に遣わされ、使命を与えられています。この使命を自覚し御心を行う人は、嵐が来ても倒れません。キリストと一体となり、御心を行う生活をする人には、願いが聴かれます。それは私心を捨て御心の成ることを求めているからです。この世に打ち勝つ一切の秘訣は、全てはキリストご自身の中にあることを受け取ることです。

コリント前書1章22節から31節、ピリピ書1章27、28節、4章11節から13節、コロサイ書3章1節から4節を熟読してください。



主はわが力

2014年10月5日

聖書朗読 詩篇84篇

〔証言〕

K兄：霊が貧しくなると、周囲に沢山の譬を見出すことができる。

譬話を聴いて共感できるのは喜びであり、だから集会への出席が楽しみです。

M兄：天の御国では、呪いも祝福も無い、恵みと感謝・賛美のみが在る。

〔集会〕 集会前の掃除の時、鴨川の窓にヤモリが居て御婦人達の間で家守話が花咲いた。

「ヤモリは、王宮に住む」（箴言）

「寧ろわが主の門守とならんことを欲うなり」（詩篇）

〔講筵〕

「その力なんじにありその心シオンの大路にある者はさいわいなり。かれらは涙の谷をすぐれども、其處をおおくの泉あるところとなす。また前の雨はもろもろの恵をもて之をおおえり。かれらは力より力にすすみ 遂におのおの

シオンにいたりて主にまみゆ。」（詩篇84篇）

世の中では、ガンバル教（我を張る）が、蔓延っています。しかし、キリスト者は、いかなる時にも主に依り頼み「頑張らない」をモットーにします。キリスト者には艱難・患難はあっても、主様に縋るものには、悩みは無い。自らは、無力なので、まことの力ある主様が力と成り、義と成り、聖と成ってください。いついかなる時でも御霊様が伴い支えてくださるので、明日もしつかり歩めます。御霊様が、私の力です。いつも私の傍に、内にいらつしやるのが喜びなのです。キリストと言う「聖霊の宮」にいつも住んでいたたいエクレシア・京都キリスト召団は、巢を得た燕子のようです。

別紙 聖書抜粋 詩篇46篇、62篇、ヨハネ伝16章、マタイ伝11章も懇ろに奨励されました。



全托！

2014年10月19日

聖書朗読 イザヤ書30章15～26節

この週末は久し振りに秋晴れとなり、さわやかな聖日の朝を迎えた。朝起きてすぐ、外に出て太陽の光を浴びながらラジオ体操をする。血行が良くなり身体が軽くなる。

今日の講筵は、イザヤ書30章15節から26節までを中心として、コリント後書11章～13章等にも触れつつ、主キリストに全托すること、無力に徹すること、主様に自分を預けていくこと、などを学んだ。講筵で注目した御言は、

「主エホバ、かく言い給えり。なんじら立ち帰りて静かにせば救いを得、おだやか平穩よりたのにして依頼よりたのまば力を得べし。」（イザヤ書30章15節）である。

奥田先生から、「静かにせば」とは、依り頼んでいること、委ねきつていることであり、自分や周りを見てあわてず、主に全托することだと解説して頂く。そのような魂に、主は、

「恩恵めぐみを施し、憐れみ給う。」（イザヤ書30章18節）

全托とは預ける側の行為ではあるものの、実は、主がそれより先に、私達の心に平安を住まわせてくださる。この平安から来る喜び、日常生活での助け、恩恵の感謝などの実体験をとおして、私達は、いよいよ主に委ね、主に信頼する魂へと変えられる。

また先生は、パウロが、コリント後書12章で、

「我、弱き時に強ければなり。」

と胸を張って述べた心意気に、私達も大いに学びましようと話された。

なお、講筵の初めに、奥田先生から、京都の集会は「参加型の集会」であり、集会を支えるのは一人ひとりであること、証言では、遠慮なく、主への感謝、支えられた御言などを語ってくださいとお話があった。心掛けましょう。

K兄が今日も集ってくださった。仕事をやりくりして、不定期ながら、1か月1回を目標に来てくださるとのこと。兄の司会を聴ける日が間もなく来そうです。



主はわが牧者

2014年11月2日

聖書朗読 詩篇23篇

紅葉も色づき始め、京都は間もなく錦繡きんしゅうの季節を迎えようとしています。

11月最初の集会は、詩篇の中でも最も有名な23篇を中心に、主様が牧者として、今なお、いかに力強く私たちを導いておられるかを語られました。

順境も逆境もあらゆる境遇は、全て神様が用意されたものです。辛い境遇を与えられたように見えても、それは神様に導かれるために与えられた試練です。「死のかげの谷」を歩むような逆境にあつても、主様は私たちと共におられ、守ってくださいます。

「汝ら心を騒がすな。神を信じ、我を信ぜよ。」(ヨハネ福音書14章1節)
と励ましてくださいます。神様は、永遠に私たちと共におられる

「助け主 真理の御霊」(同16、17節)

を与えられて、私たちを内から強くしてくださいます。しかも、神様を求める人を、決して耐え難い試練に遭わされることはありません。

「神は真実な方です。あなた方を耐えられないような試練に遭わせることはな
さらず、試練と共にそれに耐えられるよう、逃れる道も備えていてください
ます。」(コリント前書10章13節)

「わが汝らに語りし言は、霊なり、生命なり」(ヨハネ福音書6章63節)

と言われたとおり、主様の御言葉は、生命の根源、生命の栄養源ですから、これに全存在を預けて日常生活をおくれば、使命が与えられて正しい道に導かれます。その結果、霊の種が蒔かれ、霊の実を刈り取ることができます。主様は、ご自身の御言葉に責任を持って私たちを確実に導いてくださいます。



永遠の生命に至る糧のために

——ヨハネ伝6章27節——

2014年11月9日

聖書朗読 ヨハネ伝6章22～35節

雨に濡れた桜の落ち葉が、アスファルトの路面を赤く染めている。朝夕の冷え込みが木の葉を赤や黄に彩り、秋の気配を深めつつある。

今日の講筵は、ヨハネ伝6章27節の

「朽つる糧のためならで、永遠の生命にまで至る糧のために働け。これは人の子の汝らに与えんとするものなり。」

に集中した。奥田先生は聴く私達に、「朽つる糧」ではなく、「永遠の生命にまで至る糧」とは何か、また、「そのために働く」とはどういうことか、と尋ねられた。ヒントを頂いたが答えられず、しばらくして先生から、それはヨハネ伝4章34節でキリストご自身が、

「我を遣し給える者の御意を行い、その御業をなし遂ぐるは、是わが食物なり。」

と仰っている。それが答えだと教えて頂いた。以下、先生のお話の一端を書いてみる。

「キリストは、父なる神様の御意を行い、御意に従って働くことが私の食物だと言われた。みずからは何事も為し得ずと仰っているキリストは、父なる神様の言われるままを語り、一切を委ねきっておられた。私達は、キリストにならつて、主に一切を委ね、主と一つになつて（全托して）、家事であらうと、職場での仕事であらうと、置かれた場所でなすべきことをなすことです。皆さんがキリストと一つとなつて働くこと、それが私達の糧であり、キリストがともに働き給う神の業、神の栄光の顕れなのです。」

先生はこんなことも言われた。

「ヨハネ伝が好きで英文聖書も参考にしながら何回となく読んでいるが、次々と新しい発見がある。御言を食べることに由る新発見が嬉しい。」

これを聴いて私達も、無尽蔵の宝が込められている聖書の言葉を、字面だけでなく考えながら深く読むことを心掛けたい。

講筵の前に、兄弟姉妹から、主キリストに導かれる感謝と家族の消息などの証言があつた。主にある兄弟姉妹へ、季節の変わり目であり、体調を崩している兄弟姉、試練の中にある兄弟姉への執り成しの祈りを、お願いいたします。



我らの避所、また力、いと近き助け（詩篇46篇）

2014年11月16日

聖書朗読 イザヤ書40章25～31節

鴨川から眺める紅葉の美しい晴天の朝、静かながら熱い集会が持たれました。

11月2日、9日の集会は、その「集会だより」のとおり深い内容でしたが、今回もその続篇として、さらに深められたご講筵でした。「御意に従って働く」在り方とは、一人一人がキリストの細胞としてこの世に存在を示すことです。私たちは無きに等しい者ですが、キリストの御業をなすようにと一人一人に使命が与えられています。これは、自分から出た願いではなく、キリストのご本願に由る貴いものです。

御心に従って働くためには、御霊のパワーが要ります。そのためには、

「主様！ あなたと一つで在らせてください、私のうちに宿り、私の傍に居てください」

との祈りが必要です。日々の生活が、主様と共なるものであるならば、わが思いでは「とても無理だ」と思えることでも、御霊のキリストが働いてくださいますから、限界がなくなっていくます。イザヤ書40章の

「**疲れたる者には力を与え、勢いなき者には強きを増し加え給う。走れども疲れず、歩めども倦まざるべし。**」

の御言葉が現実となつてゆきます。

人生は悩み多し。主様を避け所とし、その中に逃げ込めば直ちに力を頂きます。

「**悩める時の、いと近き助け**」

です。この世では、誰ひとり「自分だけは安全だ」という保証はありません。東日本大震災のように災いは等しく及びます。しかし、キリストは、それを突き抜けた永遠の生命を約束されています。神とともに天におられた方が、地に降臨して下さり、イザヤ書35章の天国の事態を顕現して下さった上、十字架の死により黄泉（地獄）にまで降り、苦しんでいる霊たちを救い上げられた（ペテロ前書3章18～20節）のですから、ご先祖や親しい人の死についても、安んじて主様の御手に委ねて、思い煩うことは不要です。主に在る私たちは、いかなる事態に出会おうとも、キリストと同質の永遠の生命（天国に住むこと）が約束されているのです。



護りと導き

2014年11月23日

聖書朗読 詩篇121篇

司会者、M兄、H姉の証言は、奇しくも講筵の主題「護りと導き」に呼応した内容でした。人間の判断が及ばないところで、主や天使達の護りと導きがあるとのこと。だから私たちは誠心誠意温かな心根で人と関わる中で、なお、どうすべきか迷うときは尚更、主の導きに委ねて行くことが良いと思われます。

サンダー・シングに現れた主によれば、主は私たちを試練や艱難を通して霊肉ともに鍛え給い、私たちが自らの限界を知り、神にすがり祈ることによって私たちを祝福しようとなさっておられます。特別な準備もなしに祝福が与えられようものなら、その有難みを噛みしめなければかりか、すぐに失ってしまうことになる。主は本来人間を祝福したいと考えておられ、人の痛みや苦しみは主にとって何ら飲びではないと主は言われます。

奥田先生は講筵の中で、日常生活に密着した福音生活を送るように呼びかけられ、日常から切り離された観念的な信仰生活からの脱却を訴えておられます。

生活密着型の証言が集会の皆さまから、次々と出てきて、皆で集会を形作っていきたいです。奥田先生の後に続く者としては、尚更そう思います。主から知恵と力をいただき、人事を尽くして主の護りと導きに委ねて行きましょう。

奥田先生は、聖書は恵みの御言葉に溢れていると言われます。そのことに気付くには、試練と艱難を通じて、御言葉が本当に支えになっているという実感（主の聖霊の働き）が必要になるでしょう。試練と艱難は避けるべきものではなく、主から祝福をいただけるチャンスと考えましょう。そうして主から祝福をいただいたなら、主に感謝し、主を讃美せざるを得ないことになるでしょう。

残念ながら我々人間は、試練と艱難なくして霊肉ともに成長できない生き物のようです。しかし主は私たちの弱さもご存知の御方ですから、遠慮なく主にすがりましょう。主は必要な知恵や力や助けを与えてくださるに違いありません。

〔付記〕「集会だより」は京都キリスト召団の「集会の歩み」の記録として、出席者にとっては講筵の内容確認のために、その他の方には、各集会においてどんな主題でどんな内容が語られたのか、印象深かった点を中心に感想をも含めて司会者に書いていただいってきました。各回、奥田が目を通し、内容的に信頼していただけるものとしております。今後は、司会者以外の方に書いていただくこともあるかと思いますが、常に、奥田が最終責任者であることには変わりはありません。ご愛読を願いつつ。奥田昌道



祈りの土台

2014年11月30日

聖書朗読 ヨハネ伝15章1～17節

一雨ごとに樹木が葉を落として、落ち葉が地に降り積もる。落ち葉を踏みしめ道を急ぐ人、竹ぼうきで落ち葉を集める人、11月最後の日の朝の風景である。

講筵の始めに奥田先生は、黙示録にある7つの教会にあてた書簡（文語訳聖書）の中で、第3章のヒラデルヒヤとラオデキヤの教会にあてた書簡の箇所を話された。誉められている教会と、叱られている教会の姿が描かれている。ヒラデルヒヤの教会は、少しの力しかなかったのに、我が言を守り、我が名を否まなかった。また、忍耐を誉め、それ故に、

「あなたを守り試練のときに免れさせる」

とある。他方、ラオデキヤの教会は、冷やかにもあらず、熱きにもあらずとして、「励みて悔い改めよ」と言われている。先生は、ヒラデルヒヤの教会に為された守りの約束は、京都の集會に語られたと受け取りたいし、ラオデキヤの教会あての言葉も心して受け取りたいと話された。講筵の本論はヨハネ伝14章、15章を中心に、次のように語られた。第一に注目したいのは、同8章29節の

「我を遣し給^{つかわ}いし者は、我とともに在^{いま}す。我つねに御意^{みこころ}に適^{かな}うことを行^なうに
よりて、我を独^{ひと}りおき給^{つかわ}わず。」

である。「御意に適^{かな}うことを行^なっているから一人ぼっちになさらないで、いつも一緒にいてくださる」のか、「いつも一緒にいてくださるからこそ御意に適^{かな}うことを行^なえる」のか、私たちも、

「主キリストは、我とともに在^{いま}す。我つねに主の御意に適^{かな}うことを行^なうによりて、我を独^{ひと}りおき給^{つかわ}わず。」

と告白できるようでありたい。そのためには、キリストが父なる神様と一つであつたように、私達も、キリストなる幹にしつかりとつながっていること。十字架で古い自分を完全に片づけてくださっています。祈りの土台は十字架です。ガラテヤ書2章20節の自覚の下で、具体的な問題についても、

「あなたの御意を成してください。」

と祈りましょう。十字架の土台がしっかり立っている祈りは、聴かれていくのです、と。

集会后、食事をを行い、姉妹方の手作りの「炊き込みご飯」、「餃子」などを頂き談笑した。その後、出席者全員で、第1回目となる勉強会を行い、小池辰雄先生の「キリスト告白録」第3巻『聖意体現』を、奥田先生の解説を頂きながら、少しずつ読み進んだ。また、本日、「降誕節集會の案内」を発送した。友人等と呼びかけを願いたい。



主イエスはわが生命 すべてのすべて

2014年12月7日

聖書朗読 詩篇62篇1、2、5〜8節、63篇1〜8節

紅葉の季節も終わり、真冬並みの寒い日でしたが、大勢の兄弟姉妹が集まりました。
奥田先生は、最初に

「我々は、神の護りなくしてはありえない存在である。」

と始められて、私たちに対する神様の護りがいかに確かなものであるかについて話されました。

パウロは、たびたび危難に遭いましたが、常にキリストに護られていたことを、使徒行伝23章の記事をもとにして次のように語られました。

クリスチャンであるからといって、決して手厚く保護されている訳ではなく、災い、病気などから免れることはできません。時には死をも覚悟する事態になることがあります。もしも、護りがなければ、現実には本当に危ないのです。しかし、主に依り頼む人には、必ずそれに勝る大きな護りがあります。もつとも、いざという時にこの護りをいただくためには、常日頃から聖書を身読するとともに、絶えずキリストにしがみついて聖霊（御霊のキリスト、キリストの御霊）をいただている生活をする必要があります。このような地道な訓練を忍耐強く行っていると、思わぬ艱難に遭った場合に、キリストご自身が戦ってくださいることによって、私たちは根源的に護られるのです。

講筵の本論である詩篇62、63篇からは、次のように語られました。

内村鑑三先生も、独立とは神・キリストだけに頼ることであると言われたように、一人になった時に、依り頼むことができ、究極の支えとなるものは、キリスト以外にありません。何かあった時に、何を補強装置にしているかが問われますが、補強装置は、自分の中にありません。キリストに全托し、御霊のキリストが内にあるという平安と、キリストが外から護ってくださいるという安心を受けることが、最も強力な補強装置です。

そして、聖書を魂の糧として、霊的現実として受け取り、護りの中で生かされていることを確信して告白するとともに、感謝と賛美の生活をするのが大事です。私たちが頂いたこの護りの事実を自分の中に根付かせ、大樹として成長させてゆき、その大樹の陰で疲れた人、悩む人を憩わせ、慰めることのできる存在となっていたことを願っています。（参

考箇所 ヨハネ10章、17章、ピリピ2章、ロマ8章）



一つ

2014年12月14日

聖書朗読 ピリピ書1章27～2章9節

京都の集会では、これまでから

「日常生活の中での福音」

「生活に根ざした福音」

など、実生活の場で福音が具体的に息づいていることを目指してきた。キリストの生命が、その人の生活の中に具体的に生きていないと、知識として福音を語っても生命と能力が無い。集会にとっても、各個人の思いがバラバラであったり、人の思いが先行したりでは、福音のために働く力が、減退してしまう。今日の講筵は、その角度から、聖書にある「一つ」という言に注目し、ピリピ書、エペソ書、ヨハネ伝などに書かれている「一つ」を解説して頂いた。

講筵の中で、生の人間にとって「一つ」と成ることが、簡単なようで実は、たいへん難しいとあった。少人数の団体でも、各人各様の思いがあり、意見を集約するのは困難であることが多い。パウロは、そのことを十分知りつつ、ピリピの集会にあてて、キリストの福音に相応しく日を過ごさなさいと書いた。先生は、

「主に導かれて一人ひとりが成長することが集会全体の成長につながることに、ピリ

ピ書2章に「思い」、「愛」、「心」を「一つにして」とあるが、「祈りを一つにする

こと」も付け加えたい」

と話された。

集会がこのように「一つ」とされることをキリストは願っておられ、そのためにヨハネ伝17章で何度も祈ってくださった。

「これ我等（父なる神とキリスト）のごとく、彼らの一つとならん為なり」

更に先生は、「一つ」となる為に、集会員の各自が、集会の存在理由を自覚するとともに、ガラテヤ書2章20節のとおり、十字架で日々新たにされていることを信受し、体感しつつ、いつも主キリストに立ちかえり、御霊のキリストに内住していただき、その御護りと導きに委ねていくことの大切さを強調された。

今日はI君の命日。N兄は、S君の存在が京都の集会に深みを与え、心を合わせて祈ることを教えてくれたと証言された。そして共に祈ろうと呼びかけ、全員でS君と、寄り添うY奥様のことを祈った。M兄、K姉のことも。H夫妻が初めて二人揃って聖日集会に参加された。仲むつまじく正座されている姿に、誰かが「ひな人形のようにですね」と話しかけ、笑いを誘った。手術を受けるH兄のためにお祈りください。

